

第1回研究発表会要旨

(1993年12月18日, 早稲田大学文学部第一会議室)

ベルリンの演劇

——ホルヴァートの『カジミアとカロリーネ』——

河原俊雄

『カジミアとカロリーネ』の初演は、1932年、ライプツィヒ。そして翌年の1933年、ヒットラーは独裁政権を獲得。まさに、第三帝国成立の前夜、この劇はドイツの地で初演された。

この研究発表は、まず、ホルヴァートのドラマトゥルギーの確認から始める。彼は大衆に注目した。彼自身の言葉によれば、「小市民たち」(Kleinbürger)に注目した。そしてその「小市民たち」を、「時代を忠実に記録するものとして」(als treuer Chronist)描く、これが彼の演劇論の基本である。だから彼は、教条的な理念を演劇の中に持ち込まない。演劇によって大衆を意識化し、あるべき姿に大衆を導こうという姿勢もない。彼にとっての関心事は、目の前にいる一人ひとりの小市民、それぞれの苦悩を抱えながら日常をなんとかやり過ごしている一人ひとりの小市民、その心の奥を正確に写し取ることである。このことをまず確認する。

そして次に、作品分析へと移る。カジミアはある日突然、職を失った。これがこの劇の始まりである。そして職を失えば、恋人のカロリーネまで遠のき、彼は一人ぼっちでこの世にとり残される。そして彼から離れたカロリーネは、人生への冒険へと向った。しかしその冒険もあえなく失敗し、劇の終盤、やはり彼女もまた一人きりでこの世にとり残される。他の登場人物たちも同様。それぞれの登場人物たちは、心のなかにさびしさを感じ、何かするものを必死で探そうとする。しかし、どこにもない。安心して頼れるものがない。だから、仕方なく、ただ行き当たりばったり、その日その日をやり過ごして流れていく。これがこの劇の登場人物たちを特徴づける最も大きな点であろう。そして、彼らのこの姿こそ、まさに、ナチ前夜の大衆の姿を正確に写し取ったものだと言える。

そして最後に、1992年、ベルリンのシュロスパルク・テアターで上演された『カジミアとカロリーネ』について述べる。演出家はベルリンでは中堅どころのローレ・シュテファネック (Lore Stefanek)。演出の基本方針は、テキスト通りに忠実に再現するという姿勢で、万事にそつがない。舞台作りは、簡単で素朴であり、これもまたホルヴァートの意図に適っている。しかし、芝居は必ずしも生きているとは言えなかった。おそらく、その原因は、登場人物たち一人一人を駆り立てていく目に見えぬ大きな力がうまく表現されていなかったからであろうと考えた。